

飯島勅作 「We are The World」

(効果音) (居間。夕方7時のテレビニュースで、メキシコ地震の災害を報じている。)
(キッチンでは夕食の支度)

哲男の母 さあ、そろそろ夕食の用意ができたわよ。雅子ちゃん、テーブルの上のもの、みんなそろった？

金田雅子 はーい。えーと、お茶わん、おはし、おわん、…。ねえ、お父さんの席、どうする？ お父さん、今日も遅いのかなぁ。

母 お父さん、このところ毎日残業ね。もう何日も一緒に食事してないわねえ。

雅子 朝はわたしより先に会社に出ていくし、わたし、お父さんの顔忘れちゃったわ。

母 まあ、一度みんなでゆっくり旅行でもしたいわね。哲男は何をしているのかしら。牧人、お兄ちゃんを呼んできてちょうだい。夕食の用意ができたからって。

金田牧人 ちえ、また僕の役目かよ。最近のお兄ちゃん、怖いんだよねえ。何かというとすぐムキになって、お兄ちゃんと話したくないんだよ。

(効果音) (ドアをノック)

牧人 お兄ちゃん。ご飯だよ。早く来て。お兄ちゃんってば！

金田哲男 (少し荒々しく)分かったよ。すぐ行くから先に始めててくれって。

牧人(モノローグ) なんでいつもあんなに機嫌が悪いのかなぁ。また女の子にフラれたのかなぁ。あの顔じゃなぁ。(忍び笑い)

(効果音) (居間。テレビのニュース続いて。)

母 遅いから先に始めましたよ。

雅子 お兄ちゃん、早く座りなよ。おいしいよ。

哲男 なんだよ、これ。またハムサラ？ もう食い飽きたよ。たまには変わった料理を作ってよ。母さんは毎日家で何してんだよ。少しは料理の研究でもしたらどうなの？

雅子 お兄ちゃん、ぜいたくよ。こんなにたくさん食べるものが並んでいるのに。世の中には食べられない人だってたくさんいるのよ。

哲男 それがどうかしたか？ 世の中のことなんか構ってられるかよ。大体、おやじの稼ぎが悪いから、こんなものしか食えないんだよ。今日も残業だろ？ 毎晩毎晩、会社 会社、仕事 仕事で家族のことはほったらかし。一体どうなっているのかねえ、この家は。

牧人(モノローグ) あ～あ、また始まった。せっかくのご飯がまずくなっちゃうよね。お兄ちゃん、このところ本当にどうかしてるね。

哲男 おれ、今日は食わないよ。こんなもの、だれが食えるか。

(効果音) (荒々しく部屋を出ていく。)

母 哲男には本当に困ったものだよ。せめて食事時に、お父さんがいてくれたらねえ。

(効果音) (テレビニュースの音高まり、F0)

ナレーション 金田哲男は、高校受験を間近に控えた青春中学 3 年生。このところ荒れた日々を送っていました。父親の言うなりに、中 2 の時から好きなクラブもやめて、受験勉強に打ち込んできた哲男でしたが、毎日夜遅くまで働いて、日曜は一日ゴロゴロしている父を見ていると、なんのために勉強するのか疑問がわいてきて、やる気が起こらず成績は下がる一方。そこへ、小学校の時から仲のよかった同じクラスの山本由美が、最近クリスチャンになったとかで、なんとなく住む世界が違ったように思えるのも、ひそかなイライラの原因なのでした。

先生 次の日、社会科の授業で 。

先生 あー、静かに。今日は、前回の授業の説明に基づいて、「世界と日本」というテーマで作文を提出してみんなの意見を聞かせてもらおうか。

(効果音) (ガヤロ々に「えー、作文?!」「国語の時間じゃないぜ」「そんな!」)

女生徒 先生! テーマが漠然としています。もう少し分かりやすく言い直してください。

先生 そうだなあ。それじゃ、「世界と日本」、すなわち「世界における日本の役割と、私たち中学生」というのはどうかな?

植村等 ますます分かんないよ。先生、何かこう、もう少しピンと来る具体的な例を挙げてよ。

先生 君たちの頭は、抽象論にはカラキシ弱いんだな。よし、それじゃ例えば、非常に身近な出来事として、最近メキシコで起きた地震があるよな? このような、世界的というか、一国の運命にかかわるような大災害が起きた時、日本の国としての対応はどうだったろうか? 山本、書く前にみんなの参考に何か言ってみろ。

山本由美 えーと、前から感じていたのですが、日本の対応はいつも遅いと思います。世界の各国が、いろいろな救援物資などを送り始めて、やっと気がついたようにのそのそと動き出すって感じで。

先生 うん。ほかのみんなはどう思う?

植村等 おれも同感。援助額も、他の国から比べるととてもすくねえしよ。今、日本は経済大国として、お金持ちの国として世界に知られているのに、なんか恥ずかしいよ。

先生 なかなか鋭い意見だな。しかし、そのような指摘はマスコミでもされてるし、今日のテーマとしては、ありきたりでイマイチだな。そこでだ。中学生の君たちは、それじゃ何ができるかを文章にしてほしいわけだ。そうだな、世界の飢餓の問題に対する日本の対応についても、何かけるんじゃないかな。おい、金田哲男! さっきから「関係ない」って顔で外ばかり見ているが、何か言ってみろ!!

哲男 えー、世界の飢餓ですか？ 飢餓って、あの、例えばアフリカとかの？
先生 そうだ。アフガニスタン、エチオピア、エチオピア、パキスタン。今大きな問題になってるよな。

哲男 怠けて働かないから食えないんじゃないですか？
由美 そんなのひどいわ。たとえそうだとすると、現に栄養失調で死んでいく人が一日に何百人ているのよ。それにアフリカの気候や風土は、穀物が育つには適していないんです。働きたくても仕事はないし…。それなら周りの国が助けてあげるべきじゃない？!

哲男 日本人のおれとは関係ないね。日本が経済的に豊かになったとしても、それは、おれのおやじみたいな連中が、家庭も顧みず、毎晩毎晩残業して、そんな努力と犠牲の上に、日本の経済発展は実現したんだろ？ 努力もせずに、世界の人々の好意に甘えようたって、それは虫が良すぎるよ。そりゃ餓えて死んでいく人はかわいそうだと思うよ。でも、「その国の政治家たちは何をやってんだ？」と言いたいね。

由美 そんな自分勝手よ！
先生 まあよい、そのくらいにしておこう。先生は山本の意見に賛成だが、金田の主張もそれなりに筋は通っている。しかし、中学生である自分たちとの関係で考えることを忘れないように。よし、じゃあ始め！

(効果音) (街の雑踏)
ナレーション その日の放課後、哲男と植村が連れ立って帰る途中。
哲男 おい、書いたかよ。
等 まあな。
哲男 それにしても、「経済大国として恥ずかしい」なんて一丁前のこと言いやがって。でもな、何もお前が山本の肩持つことねえだろ？
等 別に肩持ったわけじゃねえよ。
哲男 アセったぜ。カッカ来ちゃってよ。ところでお前、腹減らないかよ？ お陰であのあと、ボケーっとしちゃって、今日の昼飯食いっぱぐれちゃったんだよ。ほら、あそこのスーパーでちょっとこれやらねえか？
等 やめろよ。見つかったらヤベえよ。
哲男 何、見つかるもんか。任せとけて。
等 ヤだよ。金ならあっからよ。
哲男 じゃいいや。おれがやってくっから、待ってる、ここで。
ナレーション 哲男はそのスーパーに入っていました。そしてしばらくすると、ムシャムシャ菓子パンを食べながら出てきたのです。
哲男 ほら、お前も食べよ。ただどうもないパンだぜ。まあ仕方ねえよな。何しろタダだからな。山のように積んであったんだ。一つや二つ、分かるもんか。

それにしても、世界の飢餓か…。日本にはこうして、有り余るほどパンがあるのによ。でもおれとは関係ないさ。おれに何ができるって言うんだ?! こんなまじいパン、アフリカの難民にくれてやるぜ。それー！(高笑い)

ナレーション

そう叫んで、哲男はそのパンを高々と空に投げ上げ、そのまま行ってしまったのです。それから数日後のこと。

由美

哲夫君、ちょっと待って！

哲男

あ、由美か。これから塾？

由美

ううん、教会の特別集会の帰り。

哲男

ふーん。お前、“アーメン”なってから変わったな。なんか近寄りたたいよ。

由美

そんなことないわ。哲夫君がそう思ってるだけよ。だってわたしは今でも哲男くんのこと親友と思ってるし、“できれば同じ高校に行ってほしい。以前のように頑張ってもらいたい”って、毎日お祈りしてんのよ。

哲男

お祈り？ お前が？ おれのことを？

由美

うん。だから頑張ってる！ それよかさあ、今、教会で見てきたスライド、すごくよかった。泣いちゃった。

哲男

へえ、由美が泣いたの？ 何やったんだよ？

由美

あのね、国債飢餓対策機構、英語でフードフォアザハングリーとかって言うんだけど、その働きを紹介したものなの。この団体はアメリカのクリスチャンが始めたんだけど、今では全世界に広がってるの。飢餓の中にある人々に、愛の手を差し伸べようという働きなのね。哲夫君、あたしこれ、先生に頼んでクラスみんなに見てもらおうと思うの、来週。哲男君も、あれ見たらきっと考え方が変わると思う。

哲男

そうかな。とにかくおれ、押し付けはごめんだぜ。おれはおれなんだから。

由美

分かってる。

ナレーション

そして翌週の社会科の時間。

先生

…というわけで、今日は山本の借りてきたスライドを見ることにしよう。知ってるやつもいるだろうが、山本はクリスチャンだ。この前の作文で、彼女自身も、このフードフォアザハングリーのために衣類やお金を送っていることを知って、先生は正直感動した。みんなもこのスライドを見ながら、自分は何ができるか一度じっくり考えてみる。

(効果音)

(スライドの音声)

スライドナレーション

あなたはこのような事実をご存じですか？ 1 分間に 19 人、1 時間に 1,140 人、1 日に 28,000 人、そしてなんと 1 年間に 1,022 万人もの人々が餓えや栄養失調で死んでいるということを。このような人々は、「わたしたちには、食糧も衣服も、夜露をしのぐ軒下さえもない。」とその窮状を訴えることができません。なぜなら、彼らには書くことを始め、なんら伝達の手段がないからなのです。そ

こで、だれかが彼らに代わって、彼らの声なき叫びを伝えなくてはなりません。

…

ナレーション スクリーンには、骨と皮だけになって、おなかだけを大きく膨れさせた赤ん坊が、これもやせ衰えた若い母親の、もはや一滴のお乳も出ないシワだらけの乳房を、一生懸命に吸っている姿、いや、もう吸う力さえなくじっと死を待つ姿が映っていました。

哲男(モノローグ) おれは何も知っちゃいなかった。なんてひどいんだ…。同じ地球上にこんな人々がいるなんて。このままほうっておくのか？ おれは、おれは何をしたらいいんだ？

スライドナレーション わたしたちの目を外の世界に向けるならば、そこには、物質的に豊かな日本とは違った、貧しい世界があることに気がつきます。おなか一杯だからと言って、何気なく捨ててしまう食糧が、彼らには今日の命を維持する貴重な食糧なのです。主イエス・キリストは言われました。この、最も小さな者の一人にしたことは、わたしにしたことである」と。それゆえ、今こそ、わたしたちはこの言葉の意味を考え直さなくてはならないでしょう。

ナレーション 教室の明かりがついても、哲男は一点を見つめたままでした。すぐ隣で、じっと彼を見詰める由美の熱い視線も感じないかのように、その時彼は、スライドの中の聖書の言葉を、心の中でつぶやいていたのでした。

哲男(モノローグ) この、もっとも小さい者の一人にしたことは、わたしにしたことである。…

< 完 >